

## TheSTYLE / Culture

## 名作コンシェルジュ

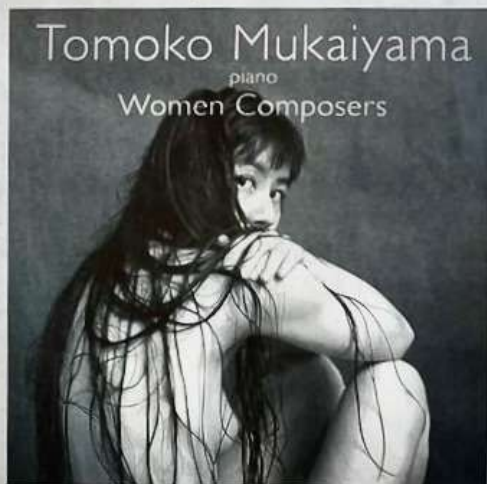


Music

向井山朋子

「ウイメン・

コンポーザーズ」

若き挑発的ピアニスト  
30年前に女性の作品弾く

最近、女性作曲家をテーマにしたディスクを耳にすることが増えた。とはいえ、ちよつと前までは、作曲は男だけの世界。女性の作曲家なんて誰も知らない。そんな時代が続いたのだ。

今から30年前のこと。若きピアニストによる、女性作曲家の作品だけのデビュー・アルバムが一躍話題になった。取り上げた作品は、20世紀後半の現代曲ばかりで、ジャケッットにも自らヌードで登場という、なかなか挑発的な、トンガったアルバムだった。

彼女の名は向井山朋子。オランダに移住し間もなかった。肌で感じ取った現地の先進的な音楽文化がそのままこのアルバムに表れていると、いい。

「フランツ・リストのための『ヘルフ・エンスター』は、ルーマニア生まれのヘルツキーによる作品。次々に変化し続ける、落ち着かない音楽は、まさしく疾走するアヴァンギャルドだ。向井山の演奏は流動的で、しなやか。そして、どこことなくポップ。

ヴァネッサ・ランは、アメリカ生まれのオランダ人作曲家。このアルバムのために書かれた「インナー・ピース」は、低音の連打から始まり、それがグルーヴ感を伴って高揚していく。

このアルバムメインは、旧ソ連で活躍しつつも、体制にまるで媚びなかつた2人の作曲家の作品だ。ウストヴォリスカヤのソナタ第6番は、強烈なク

ラスター和音によるリズムが奔流のよう押し寄せる。そして、グバイドゥーリナのピアノ・ソナタは、即興的で、呪術的な香りにも満ちる。

向井山は、ある種の過剰さを強調するというよりも、それらを構成する要素を丁寧にデザイン化しながら、響きの鮮烈さを保ち続ける。ウストヴォリスカヤ作品には舞踏性を、グバイドゥーリナ作品には、ジャズ的な歌い回しや優雅ささえ感じさせつつ。

アンコール・ピースのようにメレデイス・モンクの「ダブル・フェイス」が最後に取られている。声を主体にしたパフォーマンスで知られるモンク。彼女の作品を向井山は、ピアノを弾きながら変幻自在の声で歌っていく。さながら矢野顕子のよう。

このピアニストが選んだ作品は、連打が続くハードな、どちらかといえば凶暴にも聴こえがちな音楽が多い。しかし、そのなかにも、不思議な風通しのよさがある。果物が弾け散るとき、爽やかな香気を放つような。

その後の向井山は、一人だけの聴衆のためのリサイタルなど、ユニークな活動を行うようになった。とくにアートやダンスの分野では、孤高の存在だ。このデビュー盤には、女性作曲家に焦点を当てた先取性だけではなく、彼女自身のヴァイタリティの源泉がある。

音楽評論家 鈴木淳史

向井山朋子はアムステルダムを拠点に日本や吹米、メキシコシティなどで活動するピアニスト。

芸術祭などに参加するアーティストでもある。本作は1994年の録音。

ALTUS、取り扱いキングインターナショナル、3300円